

ピンク系トルコギキョウの 発色不良を軽減する温度管理法

トルコギキョウのピンク系品種では、開花期が5月以降の高温期出荷作型で花卉の発色の薄いものが見られ、問題となっています。そこで、熊本県農業研究センターでは、花蕾発達期（がく片除く蕾長 3mm～開花）の栽培温度がピンク系品種の発色（赤味）の度合いに及ぼす影響を調べ、発色不良を軽減する温度管理法を開発しましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 花卉の発色には花蕾発達期の温度が影響するため、5月開花の作型では、花蕾発達期に相当する3～4月の温度管理が重要です。
2. 花卉の発色は昼温 35℃では夜温が高いと濃く、低いと薄くなり、昼温 25℃では夜温の影響は小さくなります（図1）。
3. ハウス内の昼温が 30℃を超える時期は、夜温 15℃を目指した加温を行うことで花卉の発色不良を軽減できます（図2）。

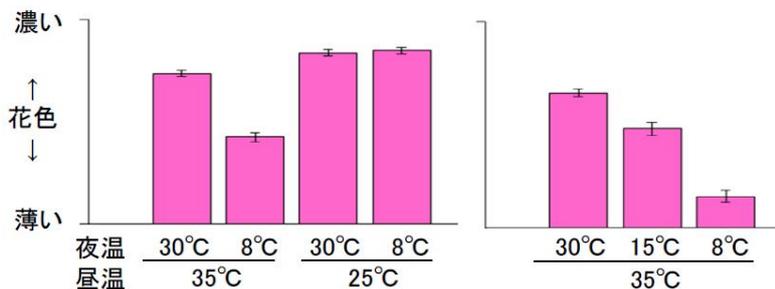


図1 花蕾発達期※の昼夜温が花卉の発色に及ぼす影響 (2018年)
※がく片除く蕾長3mmから開花まで

図2 昼温35℃における夜温が花卉の発色に及ぼす影響 (2017年)



本来の花色

発色不良花

☆ 活用面での留意点

1. 発色の度合いは、開花輪の柱頭が開いた時に、色差計（CR-300、MINOLTA）で最外と最内の花卉各3枚の中央部を測定し、a*値で示しました（a*値が大きいほど赤味の度合いが強くなります）。
2. 品種で発色不良の程度は異なります。また、高昼温かつ低夜温で発色不良が見られない品種もあります。
3. 紫外線カットフィルム展張による花卉の発色への影響はありません。
4. 詳しいことは、熊本県農業研究センター 農産園芸研究所 花き研究室 (TEL:096-248-6444) までお問い合わせ下さい。